

Title	書評：高山真著『<被爆者>になる： 変容する<わたし>のライフストーリー・インタビュー』せりか書房、2016年
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.142- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：高山真著

『<被爆者>になる——変容する<わたし>のライフストーリー・インタビュー』

せりか書房、2016 年

鈴木 智之

共感と警戒感、感嘆と違和感とが同時に呼び起こされる。このダブルバインドの感覚に妨げられて、滑らかに読み進めることができない本であった。少なくとも<ぼく>にとっては。

「共感」や「警戒感」というのは、高山さんの本書での著述のスタイル、あるいはその戦略に対してのことである。高山さんはここで、長崎における被爆経験者からの聞き取り—ライフストーリー・インタビュー—の過程を記述している。通常の（あるいは少し古風な）調査報告の枠組みに従えば、その中心的な記述の対象となるべきは、「被爆者」たちの経験であり、その語りである。しかし、本書では、彼ら／彼女らの語りを聞きとる<わたし>という主体が前面に現れ、<わたし>には分からなかった、<わたし>はこう思った、<わたし>はこの言葉に違和感をもった、<わたし>は今ようやく理解し始めているという類の述懐が、くり返し提示されていく。「被爆」というそれ自体において語りがたい経験を、「非被爆者」が聞き取っていく時に、否応なく立ち現れる「分からない」という感覚をそれ自体において主題化するかのように、そして、その<わたし>が継続的な対話の中で「変容」していく過程にこそ意味を見いだそうとするかのように、自省的な考察が執拗に継続されていく。

確かにそうだ。こういう道を行くしかない。その意味で、これはきわめて誠実な著述の形なのだという思いが、この本の読者である<ぼく>の中に生まれる。もとより、語り手自身が「語りえなさ」を抱えている。「被爆」という体験それ自体が筆舌に尽くしがたい性格（表象不可能性）を刻印されているという点でも、またそれぞれの被爆地点の爆心地からの距離や被爆時の年齢によって（まぎれもなく「被爆者」でありながら）正統な語り手の位置を認められていないという点でも。したがって、語り手がすでに、語られるべき「何か」からの「距離」を生きている。それに加えて、インタビュー実践を行う<わたし>は、どのような意味においても「被爆」経験を自分自身のものとしては語れない位置にある。その<わたし>が、語り手たちの「心情」を簡単に「分かった」と言ってしまうことはできないし、彼らの語りの意味を確定してしまうようなポジションを取ることもできない。だから、徹底的に「他者」として、他者に向き合うひとりの人間として、「対話」的に対峙するしかない。<わたし>とは、この対話の布置によって生み出された、ある関係上の言説主体のことである。そして、<わたし>という主体の介在、その自省的な分析の継続を通してはじめて、「語りえないもの」を語り続ける「他者」の姿を現出させることができる。そう覚悟を決めてしまえば、高山さんがここで展開しているよ

鈴木智之「書評：高山真著『<被爆者>になる——変容する<わたし>のライフストーリー・インタビュー』」

『三田社会学』第 22 号 (2017 年 7 月) 142-144 頁

うな方法以外に選択肢はない。確かにそう思える。

だが、その一方で＜ぼく＞は、これはやはり一種の「禁じ手」なのではないかという思いを拭うことができない。「禁じ手」と言って悪ければ、「調査者」のふるまいとして「慎みを欠く」のではないかと感じてしまうのである。ここで高山さんが「正面から」記述している＜わたし＞の迷いや試行錯誤、あるいはその上での「変容」は、多くの研究者（フィールドワーカー）が体験し、そこに意味を認め、しかし舞台裏において語られるべきものとして隠し込んできたことではなかっただろうか。「語り」というものが「対話」の中にしか生まれず、したがっていかなるインタビューも複数の言説主体の相互作用としてしか成立しないのだとしても、「調査」や「インタビュー」という非対称な関係においては、調査主体が自分の体験や自省を語ることを我慢して、「他者」の現実を語ることを主眼とするべきなのではないか。少なくとも、調査研究報告というものは、そのような「抑制」の上に成立する（あるいは、はじめて許される）言表なのではないか。あえて保守的なことを言えば、そういう思いを無視することができない。映画やドラマなどの映像作品で、「メイキング」フィルムが公開されることがあり、それはしばしば面白いものだが、「メイキング」は「本編」あつての付属物である。これを比喻として用いれば、高山さんのこの本は、いきなり「メイキング」を読ませるような唐突感がある。いや、もう少し正確に言えば、この「メイキング」過程こそが「本編」なのだと主張していることになるだろう。

ただし、その戦略の是非を、一般論として論じることはできそうにない。というのも、インタビュー実践者としての＜わたし＞の変容を語るという選択は、この本の主題的な問いに深く関わっているからである。

著作のタイトルにもなっているのだが、本書の中で高山さんは、Mさんという一人の被爆体験者の「被爆者になる」という言葉に、くり返し立ち戻って考察を加えている。Mさんは「15歳の時に爆心地から4.8キロの小菅町で被爆を体験した」男性である。彼は、自分自身の被爆体験を語ると同時に、他の被爆生存者の語りを聞き取り、記録する活動に取り組んできた。その経験をふり返って、Mさんは「わたしの人生は、被爆者になる人生だったと思います」と語る。高山さんは、この言葉を長いあいだ理解しきれずにいる。それだけでなく、どこか「肯定しがたい、違和感」を感じていたという。そして、この言葉を理解しようとする試みとして、ライフストーリー・インタビューは継続される。ここに立ち上がってくるのが、対話を継続する主体としての＜わたし＞である。

実際に長崎で被爆を体験した「被爆者」であるMさんが、「被爆者になる」と言う。それは、爆心地から比較的離れた場所で8月9日を迎えた彼から見て、自分よりも「もっと大変な思いをしてきた」人が存在するという認識の上に発せられる言葉であり、「被爆」を語ることが、単に自分自身の体験を言葉にすることにとどまらず、「もっと大変な思いをして生きてきた人たちの痛みを、自分の痛みとして内面化」していく過程としてあったことを意味する。そこにある、「被爆者」と「被爆者」のあいだの隔たり。被爆経験者であるMさんをして、「他者の

痛み」を聞き取るところからしか声を発することができないという事実。その断層が意味をもつ空間の中で、「被爆者になる」という言葉が発せられる。そして、インタビューという対話の場においては、Mさんと<わたし>のあいだに、乗り越えがたい隔たりが生じる。このような発話の布置の中で、<わたし>は、「被爆者である」ということと「被爆者でない」ということの境について思考し続けている。そして、「被爆者である」とは実体的な事実としてあるのではなく、他者の体験を自らのものとして呼び込みつつ、「他者の死」が自分自身にとってどういう意味をもつことなのかを「持続的に考える営み」、そのような「プロセス」としてしか生起しないのではないかと思うようになる。そのプロセスは、「被爆者」自身の被爆経験に対する距離、その「語りえなさ」を解消するものではないし、ましてやインタビューの聞き手にとっての「分からなさ」を払拭していくものでもない。しかし、インタビュー実践を通じて、対話を通じて、<わたし>もまたそのプロセスの中に呼び込まれてしまっている。だから、Mさんが被爆体験の「聞き書き」を通じて、「生きられた過去」に内属しようとし続けたのと同じように、<わたし>もまた、インタビューを通じて「被爆者になる」ことができる。高山さんはそう言っている。

「被爆者になる」という営為は、「聞き取り」をとおした、他者の語りを自己物語に内面化する行為によって成立している。<わたし>はMさんとのインタビューをとおして、こうした営為の存在を理解すると同時に「被爆者になる」はずである。(314 頁)

思いきった言葉である。それこそ、へたに口にしてしまつては「慎みを欠く」ものとして追及されかねない発話である。しかし、「記憶の継承」とは、こうした「他者の語り」の「内面化」の企ての中にしかない。「語りえぬもの」を伝えようとする者とそれを受け取ろうとする者との「対話」の中にしか成立しえない。そうであるならば、<わたし>もまた「被爆者になりうる」。そう言えるところまで「対話」に内属しなければならない。そこにひとつの答えがある。高山さんにとっては、この一文を書くために、この逡巡に満ちた 300 頁ほどの書物が必要だったのではないか。<ぼく>にはそう思える。

かくして「被爆者になる」という言葉は、Mさんから高山さんへ継承される（著作の表題は『<被爆者>になる』と記されている。それは<わたし>が<被爆者>になるということである）。それだけの覚悟（と言ってよいのだろうか）を語れるだけのインタビューを<ぼく>はこれまでにすることがない。これから先もできるかどうか分からない。しかし、少なくとも、この本を読んでしまったことで、他者の語りに相対する姿勢はもうこれまでと同じというわけにはいかなくなるだろう。それだけの重い意味をもつ一冊である。少なくとも<ぼく>にとっては。

(すずき ともゆき 法政大学社会学部)